

日本語授業における「日本文化事情」導入について

王 玉珊 *

1 はじめに

中国の大学における日本教育は、異文化コミュニケーションを巡る諸問題を把握し、習得者の日本語能力を伸ばす言語教育と考えられる。よって、日本語教師は発音、文法、語彙などの言語知識を教えると同時に、その言葉に現れている文化や日本人の独特な考え方や風俗などをも教える必要がある。日本語習得者に言葉に現れている文化を理解させ、異文化コミュニケーション能力を向上させることは、中国の日本語教師が直面している難題である。

学生に授業内容をよりよく理解させると同時に、日本文化への理解、文化的素養及び異文化コミュニケーション能力などを向上させるためには、長年にわたって教壇に立った経験から、日本文化事情を日本語授業に導入する必要があると感じている。これにより、日本語授業の教育目的を実現できるのである。

「日本語は勉強しやすい。日本語の漢字を見るとすぐその意味が分かるからだ」などの誤解が起こりやすい。日本語は中国語の受容が大きく、日本語の表記符号としての仮名でも中国語の漢字の草書やその一部をまねて作

られ、表記符号としての漢字も中国語の繁体字そのままであるが、千年にわたる変化を経て、日本語は特色のある独特的言語となっている。どのような言語においても、特定の言語環境において、地域で暮らしている人間に口頭や筆記などの方式で使われたきたものである。言語の特徴にはその民族あるいはその国の歴史、文化及び社会風俗などが見られる。それゆえ、日本語授業に日本文化事情を導入するのがかなり重要なことといえよう。

2 言語習得と文化

文化とは人類がみずからの手で築き上げてきた全ての成果であり、ある民族の全ての活動方式を表している。言語は文化の一部として、重要な役割を果たしている。言語は文化の基盤であると同時に、文化からの影響も大きい。文化は幅が広くて、衣食住行のみならず、ある地域で暮らしている人間の対人態度、世界観、道徳観、宗教信仰、思惟方式及び言語表現なども含まれている。一方、どの文化も独特であり、言語も多種多様である¹⁾。ある言語を勉強する際、その発音、文法、語彙及び文型だけを勉強するだけではなく、その民族の世界観や考え方まで習うべきである。こうするからこそ、言語に現れているそ

* 中国：東北财经大学 副教授

の民族の思想、行為及び習慣が理解できる。

言語は文化と密接な関係がある。人間の言語行為は文化の鏡であり、数多くの文化の秘密や異なっている文化による考え方がすべてこの鏡に映している。外国語教育は文化の境を越える言語教育である。外国語に含まれている文化行為と考え方への理解は言語の習得を促進することから、言語が文化との関係は密接的である。言語は文化の基盤であり、客観的な事物を分類したり、記録したり、記憶したり、考えたり、まとめたりすることができる。言語は最も基礎的文化伝承の手段であり、情報伝達、経験交流、連絡などの基本手段でもあり、各人類集団の最も独特的行為でもあり、文化のシンボルや各民族、各国のシンボルでもある²⁾。したがって、言語は道具でもあり、社会歴史文化と密接な関係がある。

日本文化をよく理解していないと、日本人と交流する際にカルチャーショックが起こりやすい。数多くの中国人ないし日本人が中国文化と日本文化が同じく儒学漢字文化圏に属すると思っている。このような誤解の理由は中日両国が文化輸出国と文化輸入国の関係である思惟の定式化にある。千年以上の中日交流史からすれば、日本は中国から大量の先進文化を吸収し、中国文化とよく似ている東方文化の特色を有している。しかし、中国が日本との自然環境や人文環境は異なっており、日本文化は日本人が長い歴史にわたって、中国文化などの先進な外来文化を吸収した上、日本民族の独特な考え方によるものである。よって、言語表現、行為方式などは典型的島国文化の特色を表している。

3 文化相違と言語

まず、文化の相違を表す最も代表的なもの

は言葉である。同じ意味を表している言葉にも異なっている感情や歴史連想が見られ、意味が同じでもその文化内包が違っている点は少なくない。例えば、中国語の「你」は第二人称代詞としてよく使われているが、日本語における「你」に当たる「貴方」はふだん妻が夫に対する呼びかけやカップルの愛称などとして使われている。特に口語表現にはあまり第二人称代詞の「貴方」を使わず、「苗字+敬称」、「苗字+肩書き」、人称代詞を使う代わりに敬語を使うなどの用法がよく見られる。

また、一部の祭日に関する言葉でもそうである。例えば：「端午節」と「七夕」という二つの中国の伝統的祭日が挙げられる。周知のとおり、中国では「端午節」の際、粽を食べ、ドラゴンボートの伝統的な競漕行事を行い、忠実な詩人の屈原のことも思い出す。「七夕」というと、牛郎と織女がカササギの橋で会う場面を思い出す。

しかし、日本ではこの二つの祭日はいずれも子供の祭日である。「端午節」は男児の日になり、菖蒲で飾り、鯉幟を掲揚する。「七夕」の際、子供たちは自分の夢を短冊に書き、枝にかける。こうすると、その夢がかなうといわれている。

身振り表現も異なっている。身振り表現は人類が長年にわたる作った手振りや頭の動作や表情などで言語のニュアンスやある特定の意味を表現するものである。中日両国は同じく東方文化圏に属しているものの、数多くの異なっている身振り表現がある。例えば、中国では握手という動作は挨拶する際の礼儀正しい動作であるが、日本では体の接触を避けるため、お辞儀をする。お辞儀は中国の伝統的なマナーの一種であるが、今の中国ではあまりお辞儀を通じて挨拶しない。

他には、具体的な文化相違は言葉や日常用

語にも現れている。例えば、日本人は食事の前に「いただきます」と言うが、中国ではこのような表現がない。だから、この「いただきます」の中訳はなかなか難しいのである。「食べる」や「飲む」の丁寧語として扱っているが、「我不客气了」と訳される。日本人が一家団欒の食事でも一人だけの食事でも、毎日三食の前にこの「いただきます」と言うのは普通である。もし、お客さんという身分なら言わなければならない。しかし、中国人の考え方によれば、「不客气, 我要吃了」といっても、日本人のように頻繁にいうことが少ないので、なかなか理解できない。

実はこの日常用語にはかなり深い文化内包を持っている。古代の日本では、食物は神様や天皇が賜ったものと考えられるので、食事の前に必ず「いただきます」(恩賞をいただく)と言う。現代社会では、科学の発展につれて、社会文明も進んできて、自然の恩賞と労働者への感謝の意を表するため、この日常用語を使い続けている。この面からすれば、日本人が毎日何回も「いただきます」を言うことは納得できる。

もし日本文化への理解がそれほど深くないなら、このような言葉遣いもうまく理解できないし、言語交流もうまくいかない。聞き手にわけがわからない感じを起こさせ、話し手としても納得できない。

各国の言語文化も思惟方式と世界観に現れている。強いほうを崇拜し、その後についていて、先進文化をしっかりと学ぶのは日本人が外来文化に対する従来の扱い方である。吸収、選択、改変などは日本人が外来文化を学ぶ際の基本手段であり、即ち国情にふさわしいものなら、そのまま活かし、必要ではないものなら絶対に断り、国情にふさわしくないものなら変える。日本の儒教文化に対する輸入、吸収からその外来文化への改変方法か

ら推察できる³⁾。

中国の儒教思想によれば、仁者になるため、「仁、義、礼、智、信」という五徳が必要である。これは五常であるが、「仁」をはじめとする儒教思想は日本に伝わってから、「礼」をはじめとする日本儒教思想になった。その相違点は「仁」が道德主体の人への敬愛、尊敬及び寛容にあり、「仁者が人を敬愛する」を宣揚し、自分以外の人々を敬愛するべきであることにある。

しかし、「礼」は道德主体が自分の名誉を守り、社会制度と習俗にしたがって、人倫規範も重視するし、交流するための儀式も強調する。中国人は年配者を尊敬し、親友を愛し、お互いに手伝いあい、中国の人間社会も暖かいといえるが、日本人は礼儀そのものを重視し、話し方が丁寧で、礼儀正しくしており、子供への教育もチームワークを強め、集団意識を宣揚する。一年生からお揃いの制服を着せ、学校主催のすべてのイベントに参加させ、先輩への尊敬を強調する。社会人になると、さまざまなルールを守らなければならないし、自分のやりたくないことでも、目上の人の意見に従ってやらなければならない。目下の人は目上の人に敬語を使うなど、目上の人は絶対的権威を持っている。また、チームワークを強調しており、個人利益が無視される⁴⁾。

4 日本語授業における日本文化事情導入の重要性

どの国でも自分なりの言語、文化習俗を持っており、どの言語もその誕生背景を反映している。それ故、どのような言語もその特有の文化の内包を表している。言語が属している社会文化が理解できないと、この言語がうまく理解できないし、うまく使えない。中

国にせよ日本にせよ儒教、道教、仏教からの受容が大きい、大陸文化と島国文化との相違点も大きい。日本独特の地理条件、地形、はっきりしている四季と温和的天候は、日本人の独特の民族性を作り上げ、日本人に自然への愛、親しみ及び崇拜をさせる民族品格、思想観念と審美を成した。これも日本文化の重要な基盤である。外来文化に対する輸入方式という、日本は「積極的に輸入」派であり、明治政府が文明開化の政策を決め、欧米文化を積極的に輸入すると同時に、絶えず儒教思想を日本化にさせ、儒教思想を欧米文化と融合させ、日本なりの日本近代文化を作り上げた。他には外来文化を輸入する過程で、「衝突、両立、融合」という社会文化モデルを築き、日本人の中立的世界観を確立し、ひいては「和」を基盤とする民族意識も形成した。そして、このような意識は日本の文化、思想、心理及び生活などの各方面に大きな影響を与えている。このような特徴も言語表現と言語構造に現れている。

それに対して、中国は「消極的に輸入」派である。長い歴史においては、中国文化はずっと優位性を持っており、文明中心の大国として、絶えずに周辺の国に影響を与えていた。優れている文化を誇りとして、長期的には閉鎖の状態であった⁵⁾。中日両国の社会文化においては類似点が多いものの相違点も少なくない。したがって、日本語授業には日本文化事情導入は習得者に日本文化をよりよく理解した上で日本語を勉強させることが、かなりよい教育効果を収めることができるといえる。

日本語教育現場においては、伝統的な文法翻訳法と構造分析法を重視している。日本語教師は教学の重点を日本語語学知識の説明において、語彙説明、文法分析、文型練習という決まりモデルで日本語授業をし、文法構造

を重視しすぎて、発音、語彙、文法の三大要素を強調し、日本文型、文法の説明や練習、文章読解及び試験能力などに力を尽くして、読解力と会話力を向上させてきたが、言語環境、活用能力などの面を軽視してしまった。加えて、非言語コミュニケーション能力、文化への理解力及び異文化コミュニケーション能力の養成までも軽視している。

そのため、日本語習得者は言語活用能力が低くて、場面の変化によって適当な言語表現がうまく選べなく、中国式日本語でコミュニケーションする場合も多くて、笑われる表現で交際し失敗した例も少なくない。

習得者は文型を練習するときにも単に本文や例文の読み、手振り、身振りや表情などの非言語コミュニケーション能力が向上することができないため、通じにくい日本語で交流する。例えば、前述のように「お辞儀」という身振りは日本人に重視され、初対面から日常挨拶まで、謝りから謝罪まで使われる。一方、友好関係を維持するため、日本人は出会いや離れのとき、お辞儀をするとともに丁寧語や挨拶用語を使っている。この身振りも美しい、礼儀正しいシンボルになった。

しかし、中国人の日本語習得者はよく「言行不一致」であり、練れていない様子を感じさせる。日本語文化事情を教える際、教師は日本の文学、芸術、音楽、歴史、地理などの文化知識だけを単に教え、日本人の交際習慣、社会習俗、生活習慣など広義的な文化知識を無視してしまうことがよくある。よって、習得者は日本文化への理解は一方的で、日本の伝統芸術や芸能だけ理解して、日本文化というと桜、茶道、武士道などをすぐ思い出すが、中日文化の相違点が理解できない。

学生は日本人とコミュニケーションする際、中国式思维で日本の文化を考えて、中国の思维方式、世界観で言語表現を選び、交際

を失敗することとなった。日本語教育現場で、習得者たちは教育綱要によって日本語の言語知識をしっかりと身につけ、聴解、会話、読解、作文、翻訳の五つの基本技能ができるが、うまくコミュニケーションすることができない。その理由は学生が日本社会文化をよく理解していないことにある⁶⁾。それ故、学生は日本語を勉強する際、発音、語彙、文法などの言語知識をしっかりと身につけると同時に、日本の社会文化への理解を深くさせるべきである。

こうするからこそ、学生が自由自在に日本を使え、異文化コミュニケーション能力を向上させる目的が実現できる。

この数年、言語研究界では言語活用に注目してきており、日本語教師は日本語の文法や語彙を教えるが、学生のコミュニケーション能力が向上せず、学生もうまく日本人とコミュニケーションできないと痛感した。コミュニケーションする際、日本文化からの制限もあり、日本文化に関する知識がないとうまくコミュニケーションできないから、日本語言語知識と社会文化知識を両立するべきである。

まず、日本語授業に日本文化事情を導入することは、時代発展の要求である。時代の発展につれ、文化の内包も絶えずに伸びており、言葉の意味も変わりつつある。従来、中国人はよく「食べたか」と挨拶して、衣食の満ち足りることへの関心を強調している。日本人は豊作のため、早く起きるから「お早う」で挨拶して、聞き手の勤労を褒めている。時代の発展につれて、以上の二つの挨拶用語の意味も変わった。よって、言語の新内包が分からないと、相手の本音がしっかり理解できない。

また、日本語授業に日本文化事情を導入することは、学生の言語能力を向上させる手段

でもある。「和」文化は日本文化の中核であるので、日本国民が「中庸」態度を持ち、相手の考え方や本音をよく理解し、誤解を減らすため、日本語の誕生背景、日本語の特徴及び日本語表現を理解するべきである。

最後に、日本語授業に日本文化事情の導入は教学効果を実現させる面も有する。日本語授業においては、テキストの知識だけなら、足りないし、局限性もある。もし単にテキストを朗読するだけなら、授業の雰囲気もよくないし、学生が日本語への情熱も弱くなるおそれがある。これに対し、授業に文化知識を導入して、文化関連の故事で文化知識を説明すると、学生を集中させ、日本語への情熱も強くなり、教学効果がよく実現できる。そのため、日本語授業に日本文化事情を導入するべきであり、日本文化と日本人への理解がより深まり、日本語らしい日本語でコミュニケーションできるといえよう。

5 日本語授業に日本文化事情を導入する方法

日本語授業に日本文化事情を導入する際、どの日本語教師も学生に日本文化知識を教える責任がある。より重要なのは、学生の自己アピール能力などを向上させ、中日両国の文化異同への理解力を高めることにある。一人前の異文化コミュニケーション人材を育成するため、次のような教育方法が妥当ではないかと考えられる。

(1) 解釈法

解釈法とは、教師はテキストに基づいて、関連文化知識を説明し、特定意味がある日本語語彙の関連文化知識を適当に紹介して、学生に言葉遣いやその文化内包をよく理解させる。文法を説明する際、言語環境を考えて、

学生を模擬コミュニケーション現場において、言葉遣い上の使用範囲や注意事項を強調し、日本文化の内包をよりよく理解させ、勉強意欲を高めることである。

(2) 比較法

比較法とは、中日両国文化の異同を比較しながら、授業内容と密接な文化内容を導入する。中日両国国民の思惟方式や言語習慣、世界観が異なっており、中日両国の文化を比較する際、両国特有な言葉をはじめとして説明するのは重要であろう。学生自身も文化の異同点に興味を持つといえよう。例えば、中日両国の国民が尊敬や謙遜する態度を比較する際、親族の名称、挨拶表現、謝罪表現などを比較すれば、学生の好奇心に満足できるし、学生にその関連知識を身につけさせることができる。

(3) 実践法

会話を説明する際、学生に情景会話を練習させ、模擬コミュニケーション現場に立って練習し、模擬練習を通じて中日両国の言語と文化の相違点を感じさせる。どの同時、模擬コミュニケーション現場の学生の発音、イントネーション、表情、身振りなどの不適切なところを指摘し、やり直させ、細かいところまで説明して、学生の文化意識と文化素質を向上させる⁸⁾。

6 日本語授業に日本文化事情を導入する道筋

日本語授業に日本文化事情の導入を実現するため、教師は中日両国の言語や社会文化の相違点をしっかり把握しなければならない。教師は日本文化を教えると同時に、その活用能力を向上させることを重視するべきで

ある。中国式日本語でコミュニケーションすることを注意して、学生の異文化コミュニケーション意識を強化するべきであり、このためには次のような道筋がある。

第一に、日本語バージョンのテキストを使う。特に初級レベルのとき、日本語バージョンのテキストを使ったほうがよい。このようなテキストならば、日本文化、風俗習慣などの内容が豊富である。分かりやすい会話分文でも日本文化の各方面に及び、日本文化に基づいて会話文を作り、話し手の本音がちゃんと表れている。教師が教学現場によって文化知識を導入するべきである⁷⁾。

第二に、文学作品、新聞、雑誌あるいはインターネットを生かして、日本文化、社会習俗及び文化知識に関する資料を収集すること。学生は閲読量を高め、特に有名な文学作品を読むことも日本文化知識を勉強する重要な手段である。どの民族の文学作品でもその民族文化の精髓であり、伝統文化の現代表現であり、その民族の性格、世界観、文化背景、風俗習慣、社会コミュニケーションなどの面における最も豊富な材料と考えられる。他にはインターネットを生かして、日本に関する最新情報を収集し、現代日本、社会問題などを早く、よく把握して、理解できる。このような情報はテキストには載せていないものである。

第三に、電氣化道具、音楽、映像などの教学手段を生かす。絵、ビデオなどで全面的に日本を認識させ、日本社会の風土習俗、人間関係、思惟方式などの社会文化知識を学生に理解させる。そして聴解や会話など面の能力を向上させることもできるといえよう。

第四に、日本人教師の優位性を生かす。日本人教師は自身の経験によって、自分が感じた社会概況、文化生活、風土人情などをうまく説明することができ、テキストに載せてい

ない知識を授業に導入できる。一方、学生は日本本土以外で日本語を勉強する際、日本の社会文化と言語環境がなく、日本人と直接にコミュニケーションするチャンスも少ない。日本人教師とのコミュニケーションがかなり重要になり、この人的資源をいかして、学生の会話能力を向上させるべきである。

第五に、中国人教師は言葉遣いの正しさと適当性を重視するべきである。中国語と日本語に高い言語レベルが必要であり、中日両国の文化背景もよく理解できるはずであり、母語からの影響を減らすべきである。他には学生のミスを指摘して、学生の発音、イントネーション、表情、言葉遣いなし手振りなどの不適当なところを指摘して、注意させる。文化知識を説明すると同時に、異文化コミュニケーションの能力及び学生の文化理解能力を向上させる。

第六に、授業以外の日本文化に関するイベントをも重視するべきである。例えば、日本文化に関する公開講座を催し、日本語コーナーを作り、スピーチコンテストや日本語寸劇大会などを行い、日本語の言語環境を作り上げ、学生が日本語勉強への意欲を高め、クラブ活動を通じて日本文化への理解力を向上させる⁹⁾。

以上に挙げたのは日本授業に日本文化事情を導入するための六つの方法である。どの方法を使う際においても、実用性原則、階段性原則、適切性原則に基づいて行わなければならない。導入される文化内容も授業にふさわしく、言語内容、日常会話に使われているものとすべきである。これと同時に、学生の就職進路、言語レベル、理解能力などを考慮して、教育方法をたえずに検討すべきである。

7 結び

日本語授業に日本文化事情を導入することは、学生の文化素質、言語交流能力、教学效果の実現などの面でかなり重要であると考えられる。大学の日本語教師は日本語授業に日本文化事情導入の実行者であり、責任が大きくて、言語知識をよく教えると同時に日本文化知識を教えなければならない。大学の日本語教師は中日両国の文化を研究し、その異同点をよく理解して、自分自身の日本文化上の素質を高めるべきである。適度に日本文化を授業に導入し、日本語や日本文化が理解できる、異文化コミュニケーション能力の高い日本語人材を育成するべきである。

要するに、日本語教育現場では、中日文化上の相違点を重視し、理解し、研究しなければならない。日本語教師として、言語知識を教えるのみならず、すべての教育方法を生かして、学生の日本文化への理解力を高めるべきである。こうすればこそ、学生に言語知識と日本社会文化知識を両立させ、日本語能力が高められ、中日両国文化の異同点に対する感受力が養成でき、カルチャーショックが避けられる。日本語らしい日本語でうまくコミュニケーションして、異文化コミュニケーション能力を向上させることが実現できるものと考えられる。

[注]

- 1) 徐燦「中日文化差異と日本語教育における文化導入」『重慶大学学报』第6号、p.131 参照、2004年10月発行。
- 2) 杜勤「日本言語文化仕組みに対する心理的な分析」『日本語学習と研究』第3号、p.43 参照、2001年5月発行。
- 3) 王勤「日本語教育と文化導入」『内江科学』

- 第3号、p.161 参照、2006年3月発行。
- 4) 李紅「現代日本語教育と異文化コミュニケーションについての研究」『教育と職業』第21号、p.192 参照、2006年11月発行。
- 5) 劉慧雲「日本語異文化教育モデルについての研究」『湖南社会科学』第6号、p.236 参照、2012年6月発行。
- 6) 張紅濤「大学日本語教育中の異文化教育」『ハルピン学院学報』第6号、p.85 参照、2002年6月発行。
- 7) 謝曉芳「異文化交際の視点から日本語教育方法を論じる」『黒竜江科学情報』第4号、p.125 参照、2010年4月発行。
- 8) 張玉玲「日本語教育に日本文化を導入することについての考査」『現代企業教育』第12号、p.238 参照、2011年12月発行。
- 9) 楊潔「日本語教育中の文化導入問題」、『蘭州教育学院学報』第5号、p.121 参照、2014年5月発行。

Research Related to the Introduction of Culture in Japanese Lessons

WANG Yu Shan

Dongbei University of Finance and Economics

Abstract

Japanese teaching in Chinese higher learning institutions actually is a kind of cross-cultural language teaching; therefore, during the whole teaching process, teachers should not only teach students to grasp pronunciation, grammar, vocabulary but also teach them to understand how Japanese use their language to express and show their ideas, habits, behaviors and customs etc. Thus, how to let students comprehend the essence of culture in the language and how to improve the students cross-cultural communication skills have been regarded as the essential matter for teaching staff of Japanese language in Chinese higher learning institutions to face and take into serious consideration.

The author thinks that within the elementary stage of Japanese teaching, relevant cultural knowledge should be appropriately introduced not only to help students understand better about the teaching content, but also to have a deeper understanding about Japanese culture, leading to enhance the students mastery of culture, cross -cultural communication skills and improving teaching effects.